

竹谷和之先生を送る

著者	田村 美恵
雑誌名	神戸外大論叢
巻	73
号	1
ページ	11-13
発行年	2021-04-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00002373/



竹谷和之先生を送る

田村 美恵

竹谷和之先生とは、私が本学に赴任して以来、20年以上の長きにわたってご一緒させて頂いた。竹谷先生に初めてお会いした当初、「スポーツを専攻する先生」という肩書きから想起されるイメージとは、かなり異なるその雰囲気、新鮮な驚きを感じたことを覚えている。先生は、「強靱な肉体を武器にした、押し出しの強い（ちょっと凄みのある）先生」という私のイメージする体育教員、ではなかった。対照的に、しなやかなで優雅な身のこなしと、一種、「賢者」のような風格を纏った優しい御方であった。

竹谷先生とは、これまで、総合文化コース内のみならず、教職部会、入試委員会、教員選考常任委員会などのさまざまな業務をともにさせて頂いた。それらの中には、やたら神経を使うものや困難なものも少なくなかった。そんなとき、私は、先生の温厚さについつい甘えるようなかたちで、ずいぶんと困りごとをご相談させて頂いた。先生は、いつも泰然自若とされていて、私の言葉に静かに耳を傾けてくださった。そして、先生の研究室から失礼する頃には、心の中を占めていた不安がいつの間にか払拭され、前向きな明るい気持ちで満たされていることがしばしばであった。

そんな思いを抱いていたのは、恐らく私だけではなかったであろう。というのも、私がよく知る方々のあいだでは、“困ったときは竹谷先生へ”が、まさに「合い言葉」のようになっていたのだから。

多くの方が竹谷研究室を訪れたのは、一つには、先生が本学の卒業生でもあり、外大のことをこれ以上ないくらいに良くご存じの「生き字引」的な御方であったからだろう。先生からのご助言は、いつも、誠的的確なものであった。

しかしながら、私は、光栄にも本稿を執筆する機会に恵まれ、先生のご業績のいくつかを拝読するうちに、先生が多くの方々の「相談窓口」となられていたのには、もっと奥深い理由があるのではないかと思うようになった。

竹谷先生は、スポーツ史およびスポーツ人類学を礎としたスポーツ文化論

に関して幅広いご業績をあげておられる。「スポーツ」と聞くと、普通、テニスとか野球、サッカーや水泳などといった、いわゆる競技スポーツがイメージされがちだが、先生の著作にはそうしたものはほとんど登場しない。

代わって、そこには、スペインのバスク地方に伝わる伝統的なエスニック・スポーツや、ジャック・マイヨールに代表される「素潜り潜水」、さらには、神社への奉納神事である「ねっぺい相撲」や「綱引き神事」のような勝敗が意味をなさないものなど、通常のスポーツ概念をことごとく打ち破るようなものばかり登場する。先生のご研究において、これらの「スポーツ」が重要視されているのはなぜか。

例えば、バスク地方の伝統的スポーツは、丸太切りや石担ぎ、草刈りなど、その多くがバスクにおける生業から派生したもののようである。かの地では、そうした技量の優れた者が尊敬の対象となり、仮に村の代表として試合に出場することにでもなれば、それは個人的競技の枠を超えて、共同体の期待を背負うようになる。そして榮譽を手にした者が、共同体の中核をなすようになる中で、その地域の価値観や技術が継承されていく（竹谷和之『哲学・思想をベースにしたスポーツ史の構築』）。つまり、バスクでの伝統的スポーツは、共同体（人びと）の紐帯として、共同体“「と共に」ある”という感覚を醸成する重要な一翼を担っている（竹谷和之『スポーツ学の冒険』）という。

実は、この“「と共に」ある”という感覚、すなわち、「共生」は、先生のご研究の中で、一つの重要な鍵概念になっている。“「と共に」ある”というとき、そこでは、個人が「他者と共にあ（在）る」ことがすでに前提となっている。己の存在を際立たせる以前に、己の身体を他者に向かって開き、他者を、その身体性をも含めて、ただそこに「在る」という理由だけで肯定的に引き受ける（竹谷和之編著『〈スポーツする身体〉とはなにかーバスクへの問い・Part 1.』）、それこそが先生の仰る「共生」ということになる。

ちなみに、「共にある」他者とは、人間だけとは限らない。ジャック・マイヨールにおいては、それは、12気圧にもなる深海（グラン・ブルー）であり、深海に彼を“溶け込ませる”（ジャックの言）方法を教えてくれたイルカのクラウンでもあった、と先生は分析されている。

竹谷先生が大切にされているのは、こうした“「と共に」ある”という精神的、身体的地平の上に成立する営み/スポーツなのであろう。そうした営み/スポーツは、他者と競争し、相手を打ち負かすことを専ら追求するような近年の競技スポーツ、さらには、グローバリゼーションの下での弱肉強食的な社会に対する強烈なアンチ・テーゼともなっている。

そう考えると、先生のもとを訪れたときに感じられた安心感や前向きな気

持ちの源は、「私」という存在がそれとして受けとめられ、肯定されたことから来るものであったような気がしてならない。

先生は、教授会でのご退職のご挨拶で、“競争原理ではなく、共生原理を視野に入れたスポーツ文化論をこれからも志向していきたい”とおっしゃられていた。きっと今後も、そんな先生のもとを多くの方々が訪れ、元気づけられて前途を拓いていくことだろう。

先生には、どうかご自愛下さり、末永く私たちを見守って頂きたい。

